

備陽史探訪の会

秋の古墳めぐり

操山古墳群を歩く／＼古代吉備のもうひとつの顔／＼

平成十四年十一月三日(祝)

○十一月三日(日・祝)

八時半・福山駅出発

十時・岡山IC

十時半・「神宮寺山古墳」見学

路上にバスを停めて、三分ほど歩きます。道路の南に見える神社がそと。

十一時・操山里山センター

多目的室にて全体説明します。雨天の場合には、ここで昼食をとります。

十一時半・遊歩道出発

「旗振台古墳」見学

尾根の上に立つ方墳です。

天気の良い時は、ここで昼食です。

「八疊岩古墳」見学

巨石を用いた横穴式石室の古墳。児島湾を見下ろす絶好の立地。

「三又古墳」見学

入り口はひとつ。けれども中に入ると、石室はふたつ。珍しい古墳です。

「金蔵山古墳」見学

全長一六五mの前方後円墳。後円部には堅穴式石室を覗く事ができる。

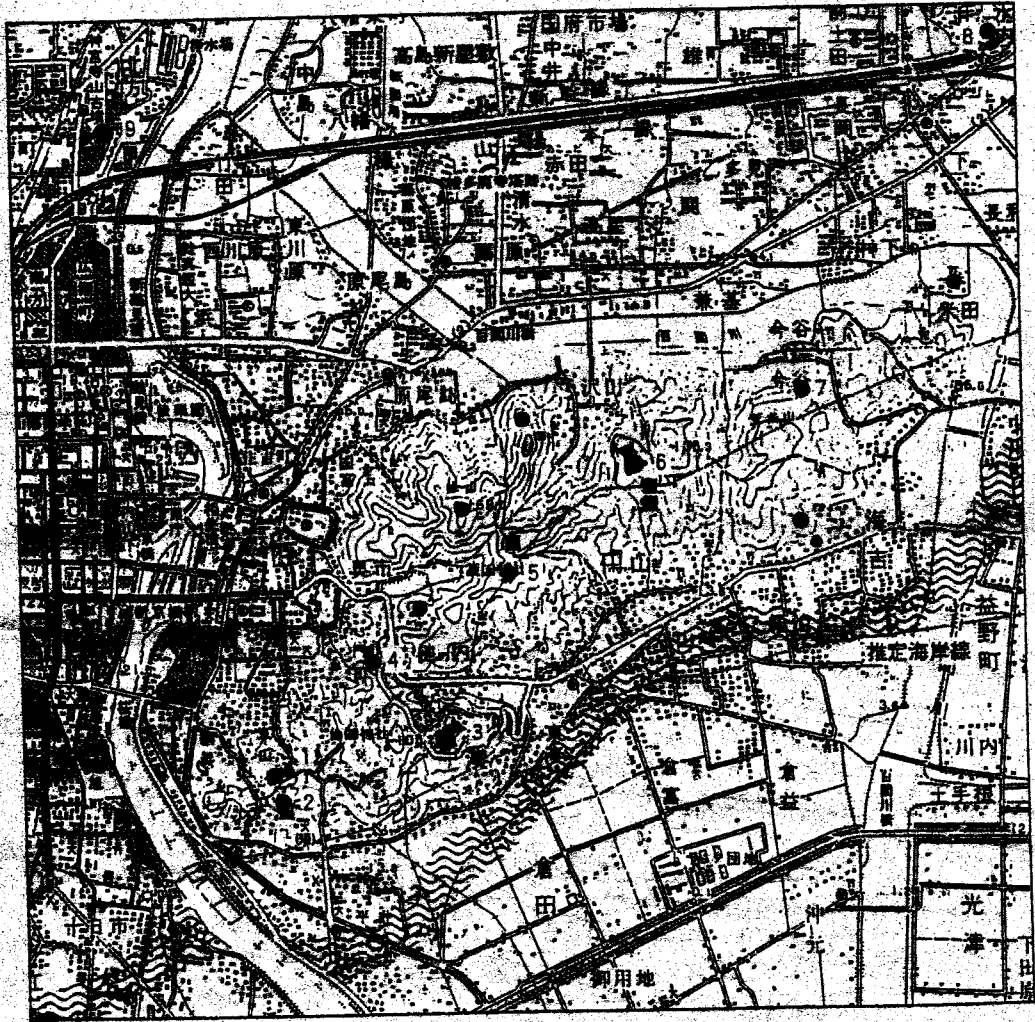
「石鉄山古墳」見学

「沢田大塚古墳」見学

大形の横穴式石室。

十五時・操山里山センター出発

十八時・福山駅到着予定



1. 網浜茶臼山古墳 2. 操山109号墳 3. 漢茶臼山古墳 4. 操山103号墳
 5. 旗振台古墳 6. 金蔵山古墳 7. 経坑古墳 8. 中央山王山古墳 9. 神宮寺山古墳
 位置および周辺の前半期古墳 (S=1/50,000)

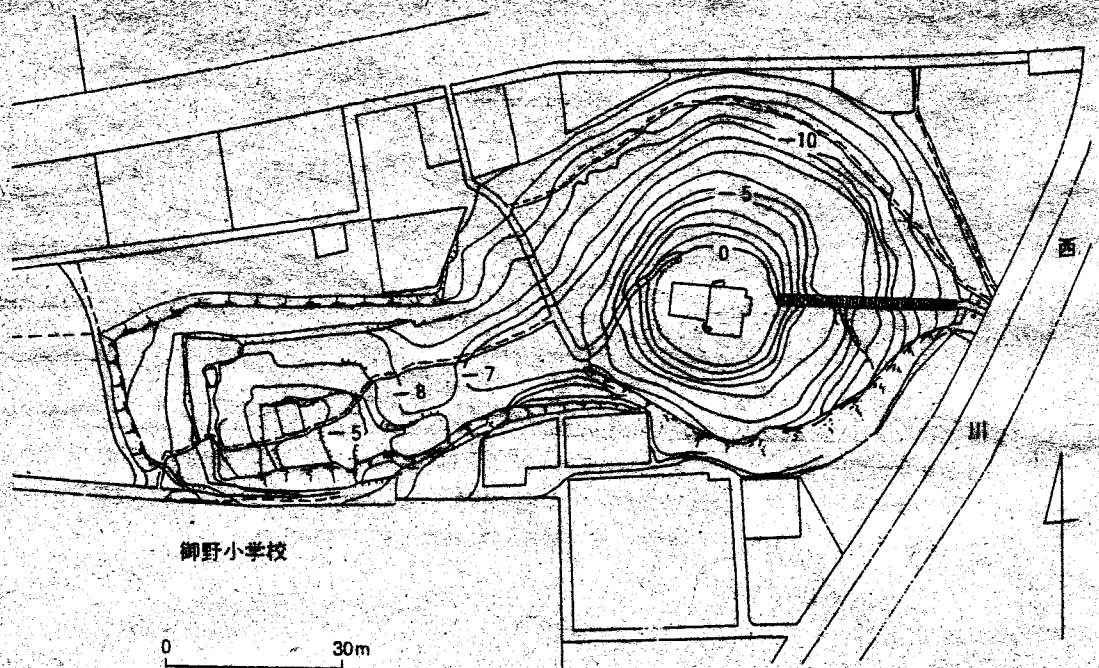
神宮寺山古墳

(岡山市中井町二丁目)

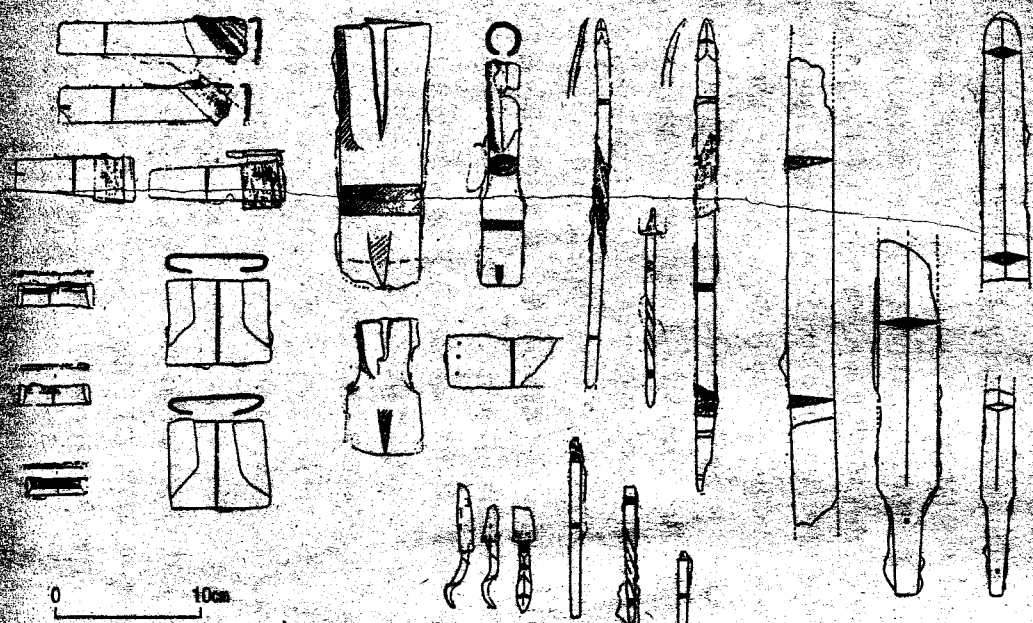
御野みの小学校の北東に隣接する小山が、神宮寺山古墳と呼ばれる前方後円墳である。一九五九(昭和三四)年に国の史跡に指定され、保存がはかられている。

後円部に天計神社あまはかりが鎮座し、前方部は墓地に、周囲は宅地や小学校地となつて、墳丘はかなり変形し、特に南側では原形をとどめない。前方部をほぼ西に向け、前方部二段、後円部三段の築成で、墳長約一五〇m、後円部径約七〇m、同高約一三m、前方部長約七五m、同高七mの規模をもつ。墳丘斜面には葺石ふきいしがあり、円筒埴輪などが採集されている。北側くびれ部にはやや突出した斜面があり、造出つくだしと考える人もある。また、かつては盾形の周濠しゅうわうがめぐるとされているが、岡山市教育委員会による隣接地の発掘で、整った周濠の存在は考えにくくなった。

埋葬施設は後円部頂に竪穴式石槨たてあなしきかくの蓋石が露出しているほか、副葬品ふくざうひんだけをおさめた小竪穴式石室こたてあなしきむろが知られている。小石室は一九六一(昭和三六)年に乱掘され、鉄剣、鉄刀、鉄鎌、鉄斧、鏃やぶこ、鏃やぶこ、鏃やぶこを二〇〇を超える鉄器が出土し



神宮寺山古墳の墳丘 (文献1から)



神宮寺山古墳出土の鉄器 (1/5) (文獻1から)

た。内法は長さ一・五尺、幅〇・五尺、高さ約
 〇・九尺であり、床は砂利敷きであった。長軸は墳丘の主
 軸とほぼ平行であり、蓋石が露出する石櫛とずれた位置関
 係にあるため、拝殿の下に未知の埋葬施設があり、それに
 付随するものとの解釈もできる。一方、前方部からも刀、
 甲冑、槍、鉾の破片が出土したと伝えられ、前方部にも埋
 葬があった可能性は高い。

築造の時期は、周濠と造出をもつとの考えともあわせ、
 古墳時代中期初頭とされてきたが、最近では埴輪の特徴な
 どから前期後半とする見解が定着しつつある。

旭川西岸平野では、本古墳に先行して七つ塚一号墳、都
 月坂一号墳など小規模な前方後円墳や方墳が乱立した状況
 にあつたが、このような大前方後円墳が突如として出現す
 ることは注目に値する。中期の築造と考えられていた頃
 は、前期末とされていた金蔵山古墳に後続すると理解され、
 旭川東岸の前方後円墳が金蔵山古墳を最後に築かれなくな
 るのに、西岸では神宮寺山古墳を含めて以降も築造される
 ことから、両岸平野の政治統合が神宮寺山古墳の頃西岸勢
 力の手で達成されたとの見解が西川宏先生によって示され
 ていた。築造時期に関する認識が変わった今日においても、
 この評価は非常に魅力的である。

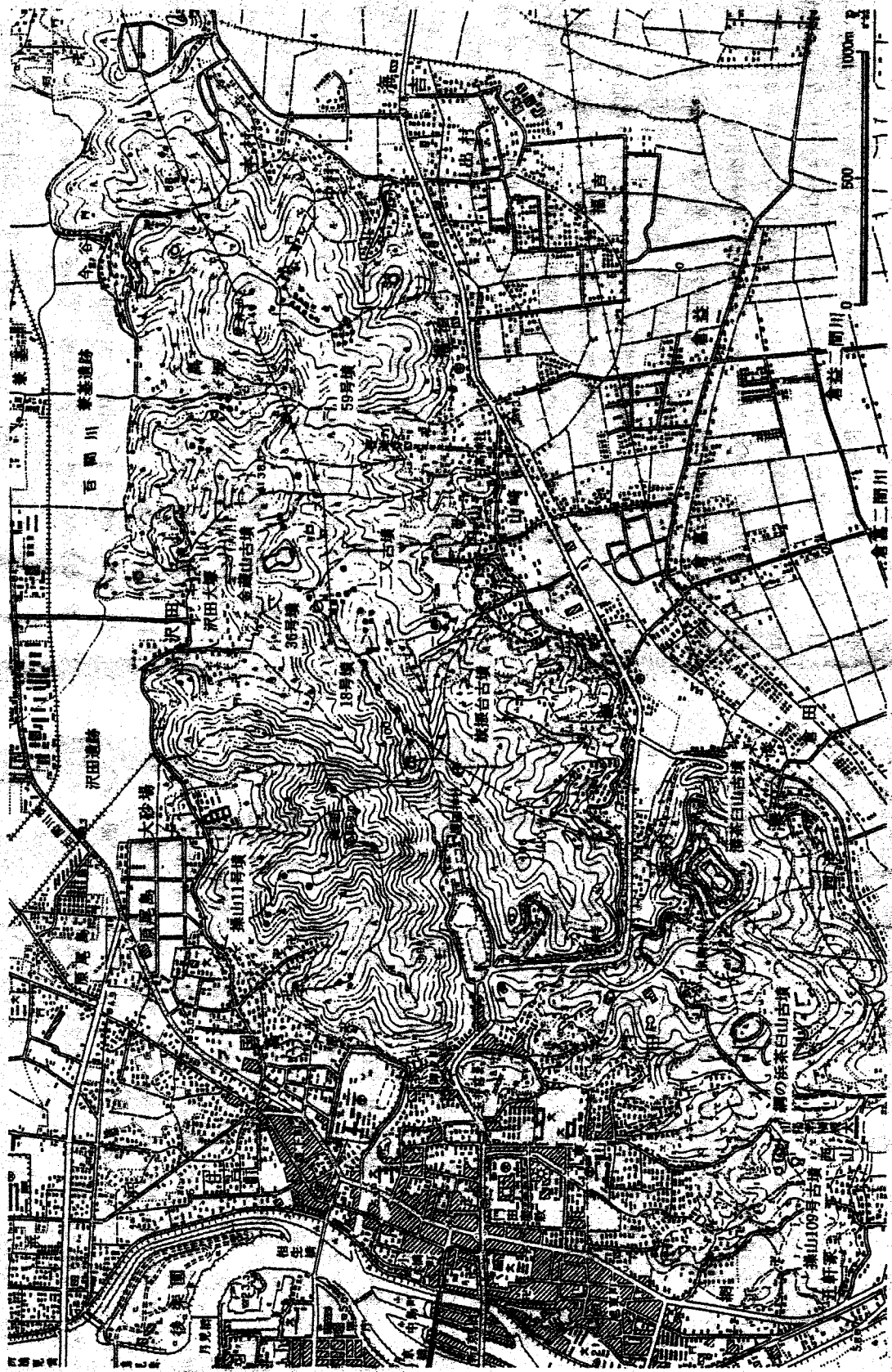
岡山市街地の東に横たわる操山山塊に所在する古墳の総称で、この山塊は東西約二キロ、南北約一キロにわたり、標高一六九メートルの操山を最高位にして、標高一〇〇メートルの山並みが東西に並ぶ低丘陵の独立山塊である。操山山塊は古代上道郡の南西端部にあたり、弥生時代から古墳時代にかけての旭川河口の左岸域を占めるとともに、北側には備前国で有数の遺跡形成地になる旭川下流左岸平野を擁し、東側には古代の要港である石間津も開けている。山塊の南側には吉備穴海（現児島湾）が山麓に迫り、当時の中心地の後背地をなし、恰好の古墳築造地といえる。

操山山塊に所在する古墳は現状で前半期古墳が二四基、後半期古墳が一〇二基の確認をみているが、実数はこの数字の二〜三割増しと推定される。前半期古墳の墳形の内訳は、前方後円墳が六基・円墳が一二基・方墳が六基であるが、現状で円墳に識別されているものにも本来方墳であったものが幾つか含まれているよう。これらの内で金蔵山古墳・旗振台古墳・護国神社裏山古墳は発掘調査が実施されており、この外に網浜茶臼山古墳・湊茶臼山古墳・経塚古墳等の著名な古墳も含まれている。六基の前方後円墳の内、全長八〇メートルを超える操山一〇九号墳・網浜茶臼山古墳・湊茶臼山古墳、金蔵山古墳の四基は、古代内海航路の要路の吉備穴海に沿う臨海性の大形前方後円墳の系統的な展開状況と評価される。同時に大形前方後円墳の集中状況は吉備地方でも有数の地になる。前半期古墳の築造状況は個別的な占地を示し、吉備地方の単位平野背後の丘陵上に多く見られる。前方後円墳や前方後方墳を含む円墳・方墳の系列的な古墳群の形成状況とは異なっている。特に、前方後円墳の形

成状態は山塊西半の旭川河口背後付近を占める傾向が顕著である。

後半期古墳はすべて横穴式石室墳からなり、石室の構築状態から大多数が後II期から後III期前葉の築造時期と推定されるが、終末期特有の超小形石室墳も数基含まれている。古墳の占地状況は、ほぼ全山塊に及ぶが、山塊南西端の前半期の前方後円墳が集中した旭川河口背後には、ほとんど認められない。これらの内で、二基は土木工事等に伴う緊急発掘が実施されているが、大多数は分布調査以上の調査が及ぼされていない。後半期古墳の築造状態は、大局的にみて、大形石室墳の単独あるいは盟主的に中期石室墳数基との群成、中形石室墳の単独または数基の群成、小形石室墳一〇基前後の小群集墳の形成、超小形石室墳の単独とに分類できる。しかし、操山山塊の後半期古墳群には、各地の古墳群形成地に見られる本格的な群集墳は形成されていない。石室の規模は全長一二メートルを超える大形石室から幅員数十メートルの超小形石室までの各段階があり、石室の形態は両袖型・片袖型・流れ（無）袖型の各種や構築状態の各様の構造が見られる。なかには玄室が二股状に分かれた特異な石室や、石障を伴う石室も知られている。後半期古墳は、巨石墳や石槨式石室等の特殊な石室構造には欠けるものの、この期のほぼ全部の規模と形態の石室が揃っている。須恵質陶棺や火葬骨を伴う石室も認められるが、石棺を伴う石室墳は一基もない。

操山古墳群の古墳時代全期間を通じた形成状況は、前IV期末から後I期初の横穴式石室墳に欠け、前半期と後半期の築造状況の間断を明確に示している。しかし、両者を比較すると古墳築造の急速な質的縮小と量的増大の典型的転換状況が顕著であり、全体的に古墳の種類と築造時期が教科書的の形成状況を示している。



新山古墳群 古墳の分布

○前中期古墳 ●後中期古墳

III 金蔵山古墳 關山市澤田

國鉄山陽線の東岡山駅から旭川の鉄橋にかかるまでの車窓の左側に高い丘陵が眺められる。金蔵山古墳はこの丘陵の中にある独立の峰で、山裾の沢田部落の背後にそびえている。この古墳は全長一六五坪、後円部の高さ一八坪、前方部の高さ一五・五坪の前方後円墳で、前方部はほぼ北に向いている。後円部から前方部に移行する間側に進出と考えられるものがあり、西側のものは崩れて不明瞭、埴輪は三段の配列である。

この古墳は、すでに一八八四年頃から発掘が行なわれ、当時、多量の副葬品などが出土したようである。さらに一九二六年以後、しばしば発掘が行なわれたが、あまり深部には及ばなかつたようである。これら再三にわたる発掘については、正式に記録されることもなく放置されてきたが、本古墳の既出資料の重要さを考え、正式発掘が企画された。

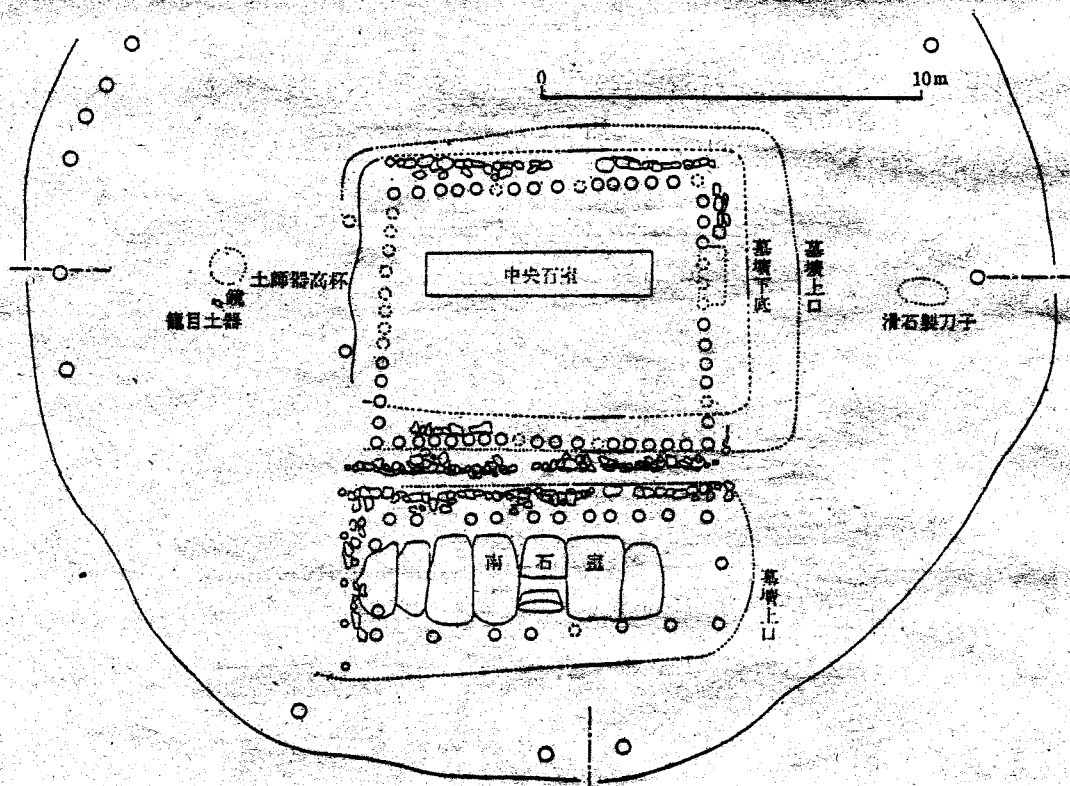
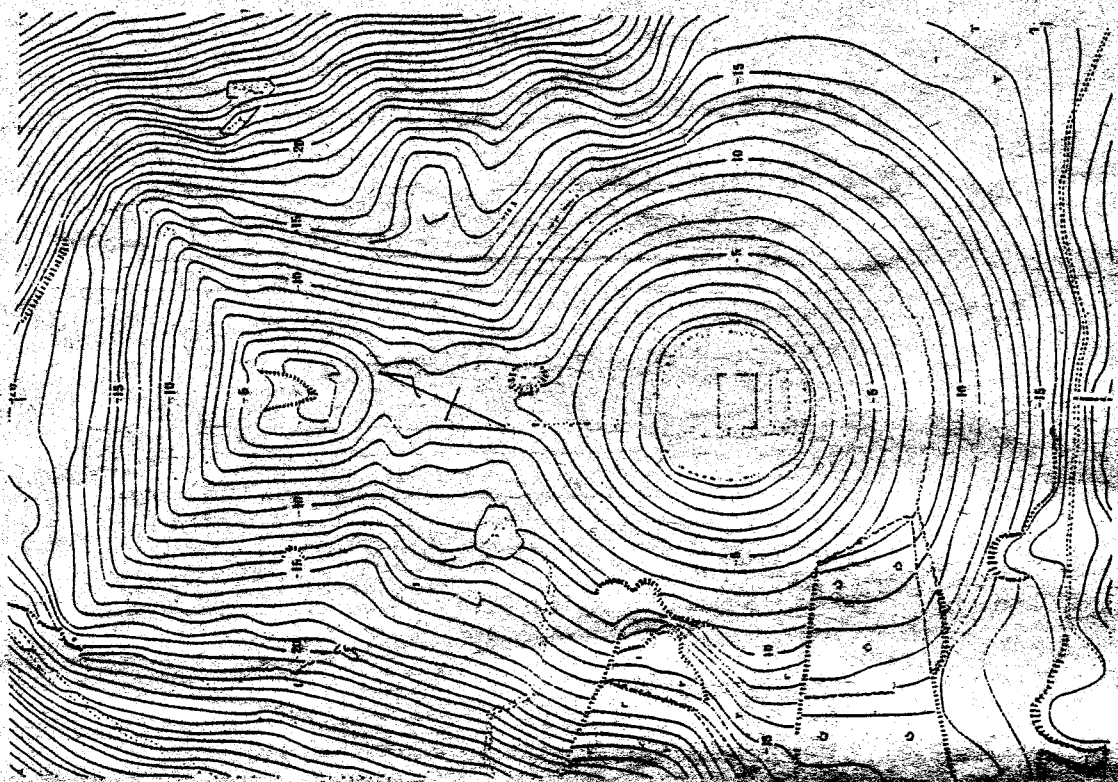
発掘は一九五三年三月二十六日から同年五月十一日に至る四十七日間、それ以外に、八月、九月にわたり墳丘外形の測量も行なわれている。この発掘は、主として後円墳頂部に対するもので、墳丘の円筒埴輪列の一部に対する調査も実行したが、前方部の発掘調査は行なわなかつた。

後円墳頂部には、外周をめぐって円形の埴輪列があり、それが北辺の部分で二列となり、前方部に向って背の両縁にそってのびている。これらの埴輪は他の円筒埴輪より大型のもので、一部に蓋の破片も見えられたが、すべてが形象埴輪の円筒部とは考えられない。この円筒列の内部に方形に繞る埴輪列が二区画あり、この二つの方形埴輪区画の外側には板石積みや、砂利敷の部分があり、両区画は明瞭に分離されている。二個の区画のうちほぼ中央にあるものが大きく、南側のものは小さい。中

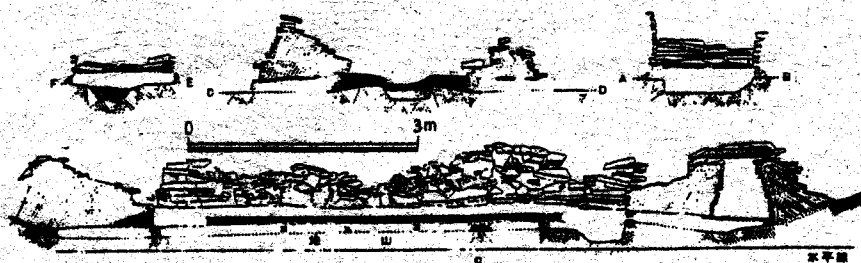
央区画の下に堅穴式石室が発見されたが、過去の発掘でようやく痕跡が残る程度に破壊されていた。この石室の東に、これに接して副室が未掘のまま残され、四個の埴輪を始め多量の副葬品が発見された。南の方形埴輪区画の下にも、堅穴式石室が発見されたが、すくなくとも明治時代以前に発掘の行なわれた痕跡が残されていた。

墳丘上からは、中央石室の長軸線の西で、方格八乳鏡・土師器皿・高杯などが発見され、土師器皿には内外面に竹籠の編目が印されていた。また東の部分では、滑石製刀子が出土している。中央石室内の残存副葬品としては、硬玉・碧玉・碧玉製管玉・碧玉製觔形石片・碧玉製筒形石片などの玉類以外に、筒形銅器・刀・剣・鏃・鉞・鉋・刀子・甲・その他の鉄製品などがある。この石室に附属する副室中の四個の埴輪区画からは、鉄製の農具・工具・武器を始め鉄製斧形品・筒形銅器・碧玉製釧形品が発見され、意外からは、鉄鏃・山形刀子・鉞・ヤス・釣針のほか四〇個以上の櫛も残されていた。南部の石室中には、変形二神二獸鏡・碧玉製管玉・滑石製勾玉・琥珀丸玉などのほか、鉄製品として剣・刀・鏃・鉞・鏃・短甲・針・具形品などがあり、櫛も発見されている。

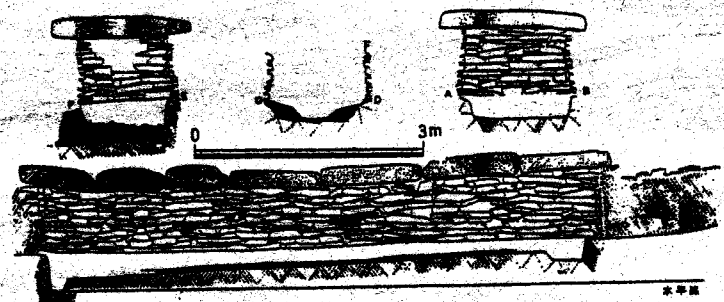
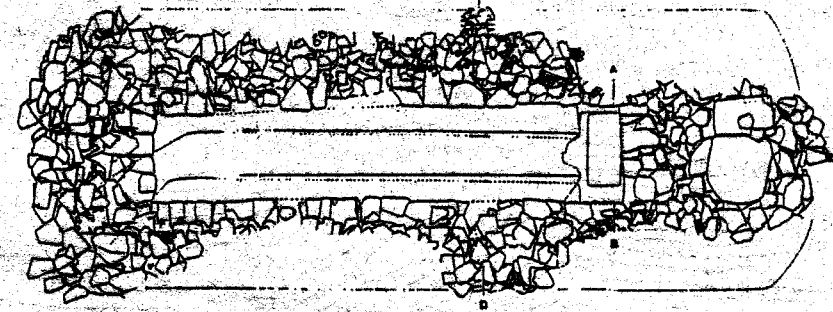
二区画の方形埴輪列中には円筒埴輪以外に、盾・蓋・鍔付蓋などが組み合わされており、列中に入らない部分に水鳥・鶏・家・短甲・罌形などの諸形象埴輪が、主として両方形埴輪区画の間を中心として発見されている。これらのもの以外に前方部からもややおもむきの変わった、蓋・櫛などが発見されており、前方部にも埋葬の行なわれていたことが推定される。



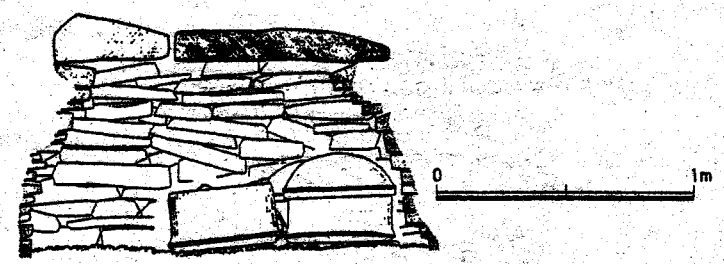
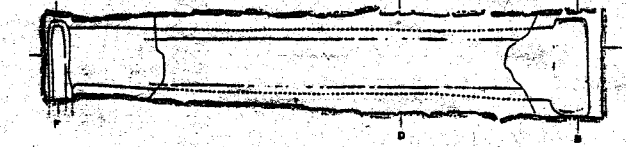
金蔵山古墳の墳輪列と後円部頂部の墳輪列
 (『金蔵山古墳』倉敷考古館, 1959より)



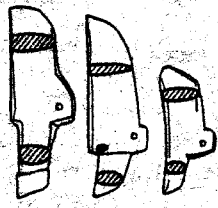
中央石室



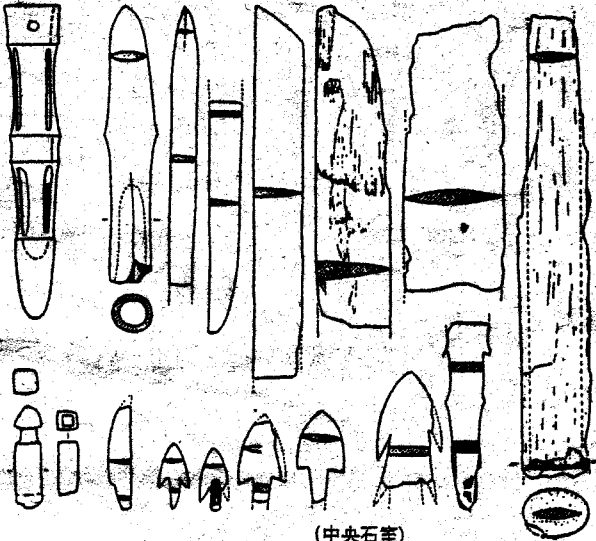
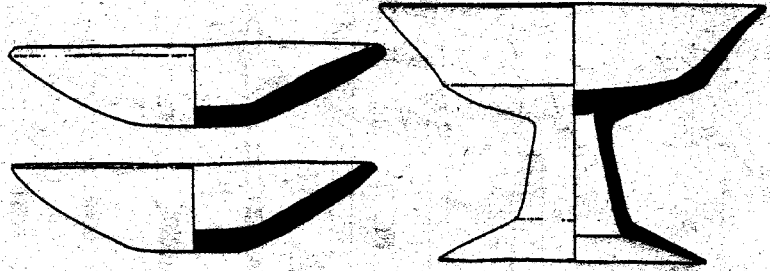
南石室



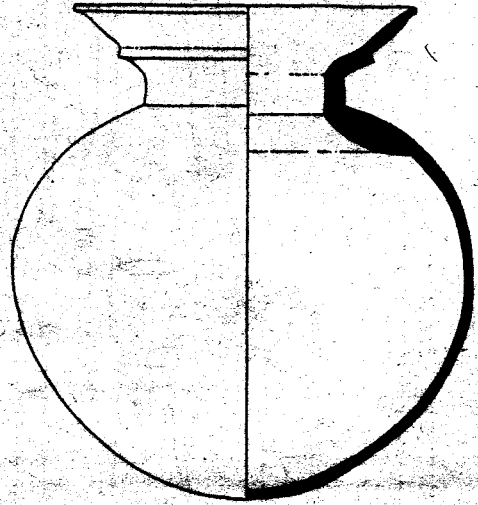
中央石室副室



(墳頂部)



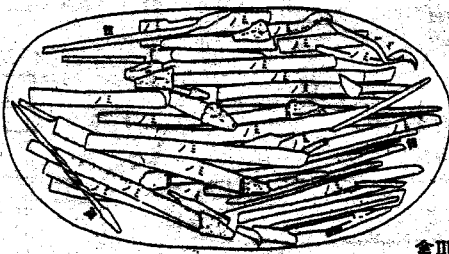
(中央石室)



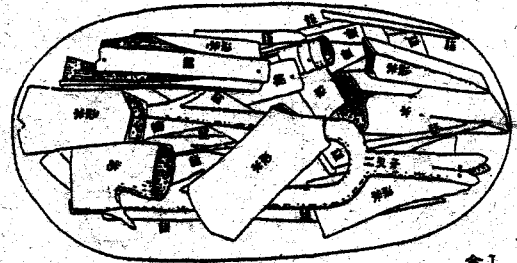
(墳頂部)



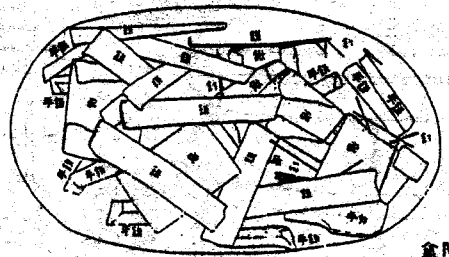
金藏山古墳 墳頂および中央石室出土遺物 (1) (S=1:3)



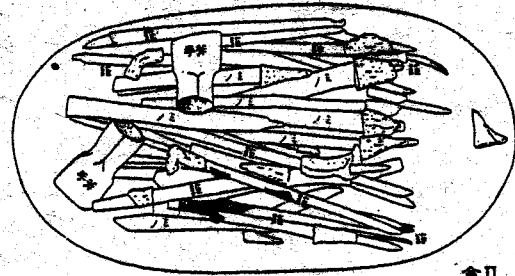
盒Ⅲ



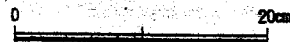
盒Ⅰ



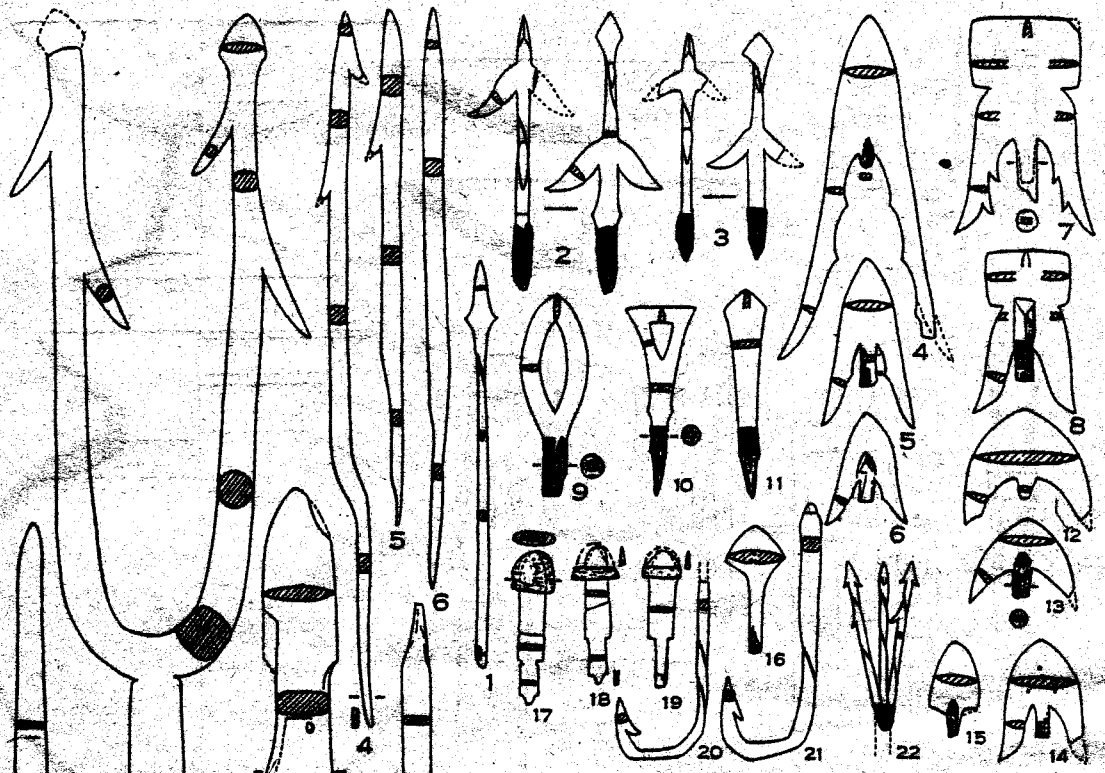
盒Ⅳ



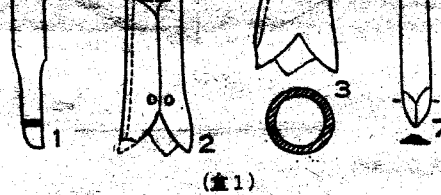
盒Ⅱ



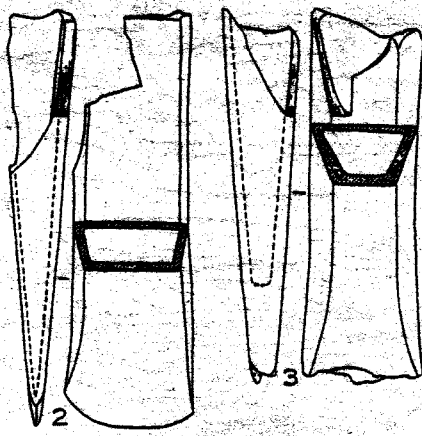
金藏山古墳 中央石室副室出土盒 (2) (S=1:6)



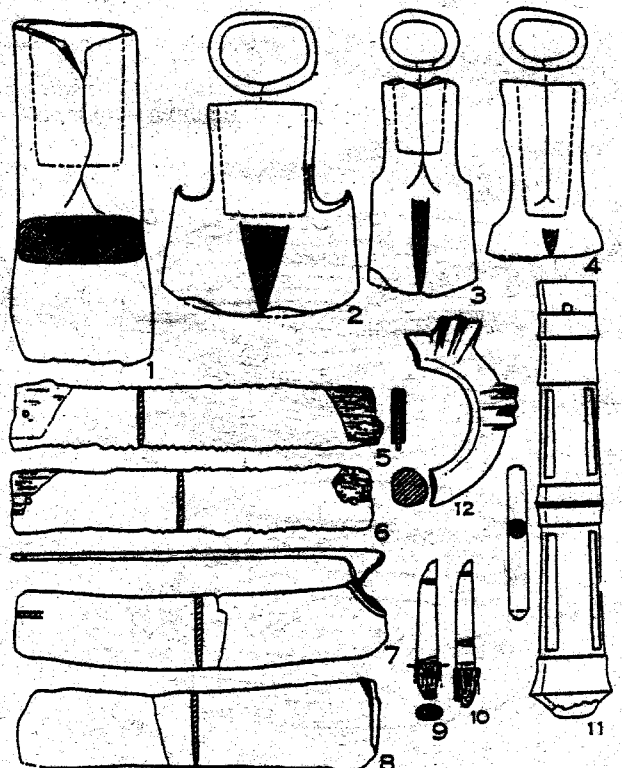
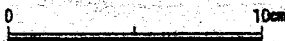
(中央石室副室)



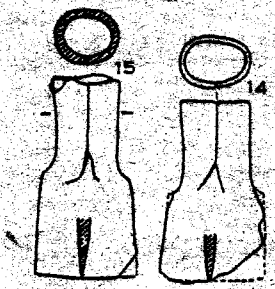
(盒1)



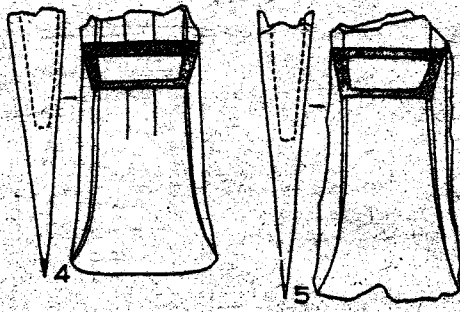
(盒1)



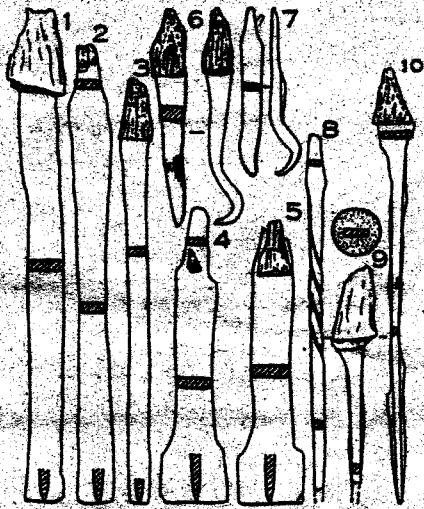
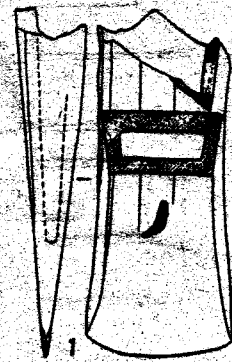
(盒1)



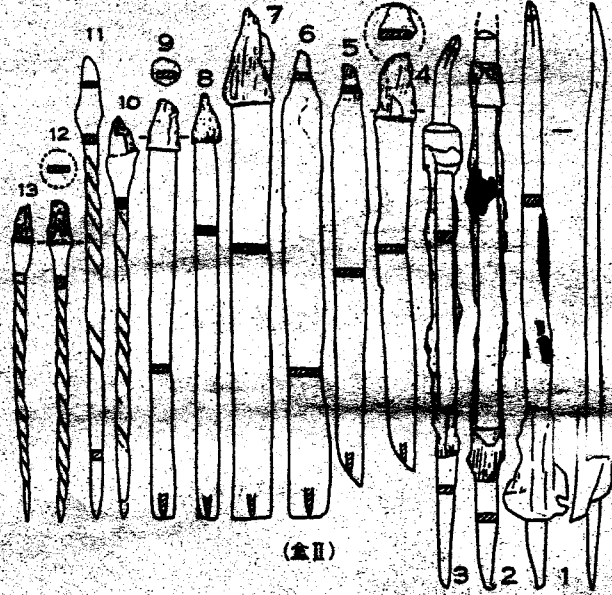
(盒II)



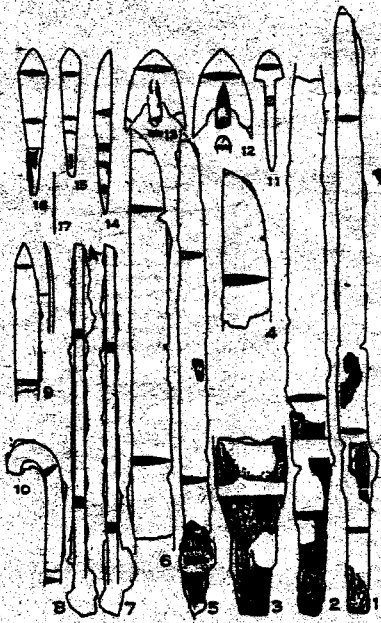
(盒I)



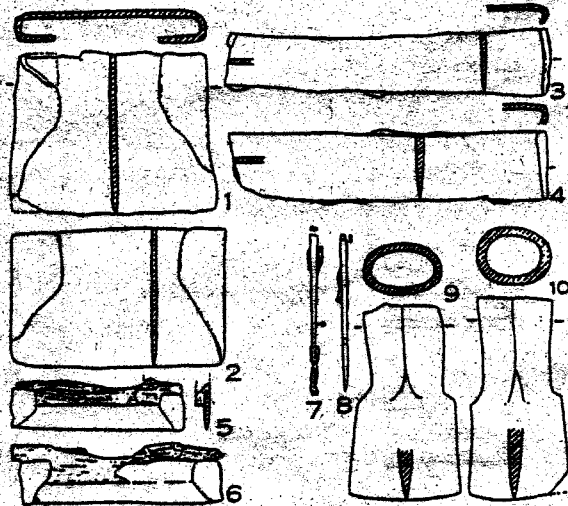
(盒III)



(盒II)

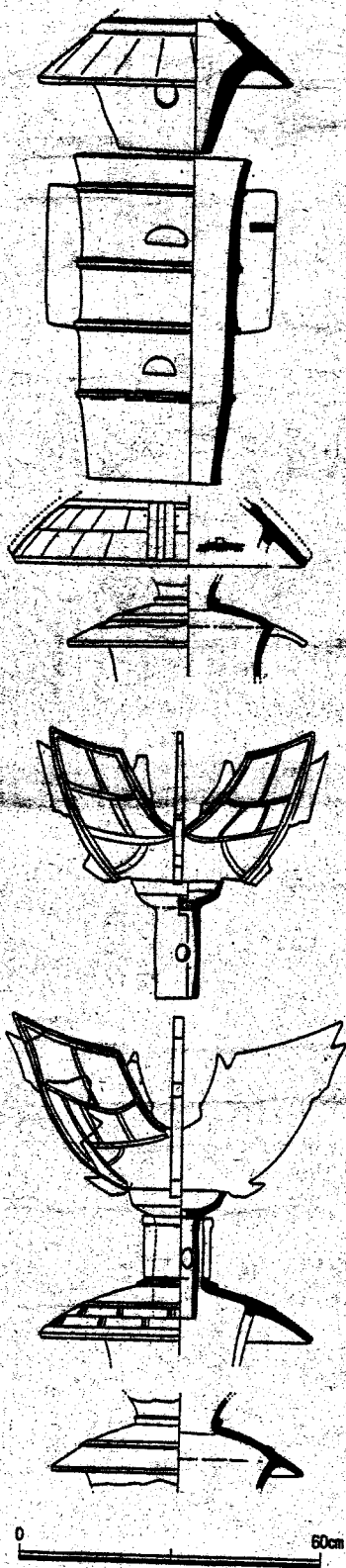


(南石室)

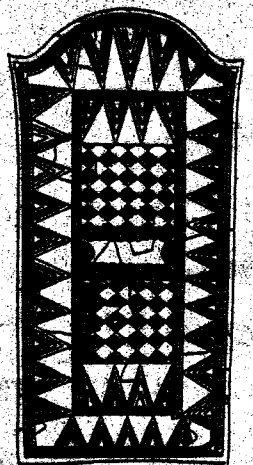
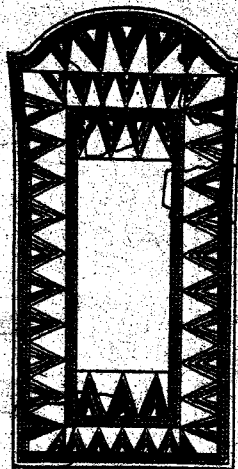
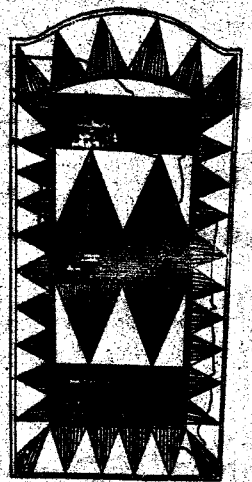
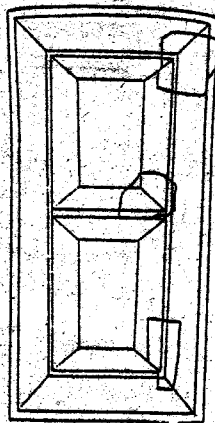


(盒IV)



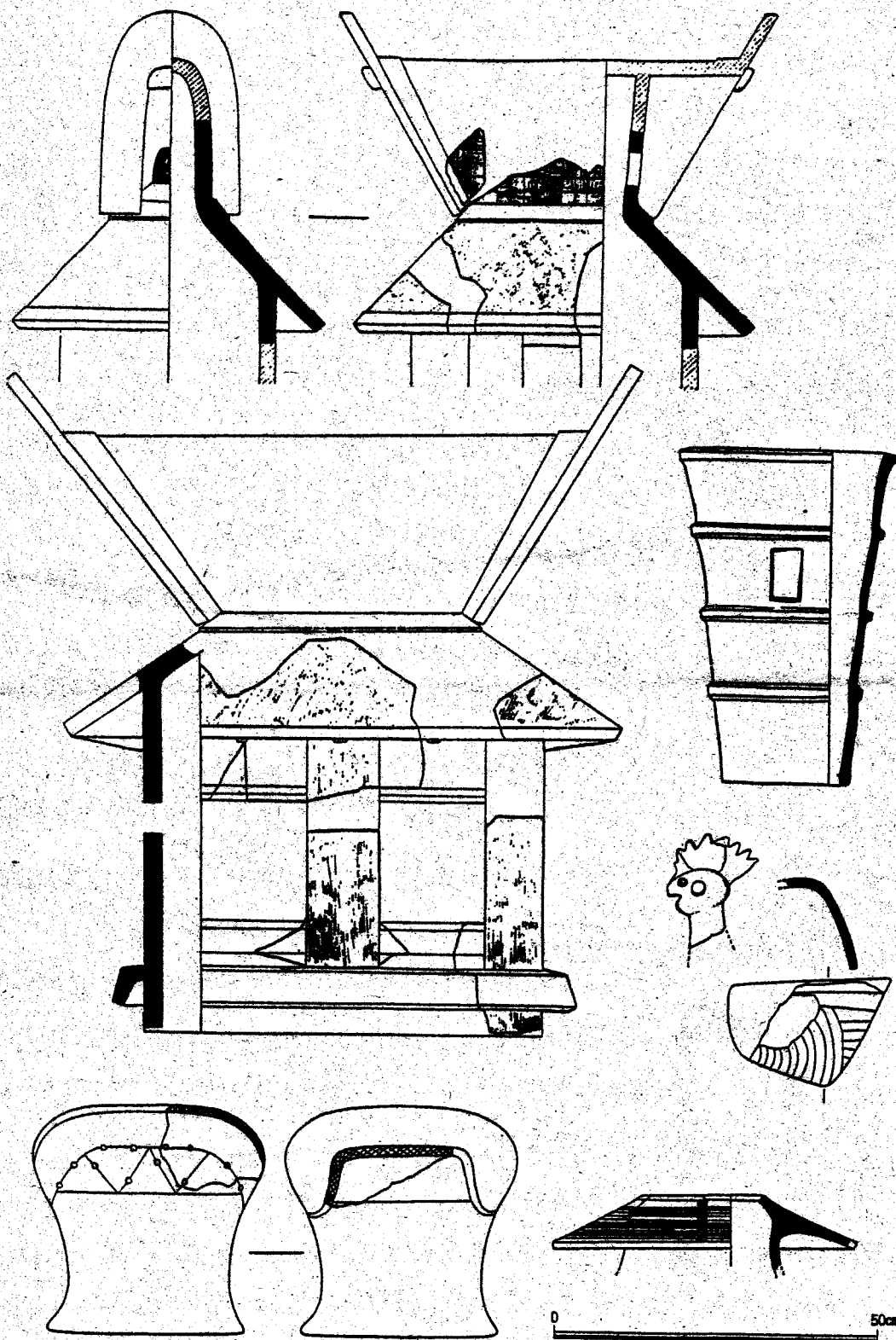


0 60cm



0 100cm

金藏山古墳 出土遺物 (5)



金藏山古墳 出土遺物 (6) (S=1:10)

平成十四年十一月三日

編集発行：

古墳部会